

## 共同研究を終えて

研究副代表者 佐野 賢治

### いまなぜ民具か？ ——国際常民文化研究の有形民俗資料として——

近代化の諸矛盾が露呈してきた大正末期から昭和の初期において、伝統的な生活文化の見直し、再評価をしようとする一連の動向があった。民家・民謡・民芸・民具・民俗芸能・民話などいわゆる“民”の発見ともいえるべき注目であり、柳田國男の民俗学によって集成された。この中で、「民具」は渋沢敬三（1896～1963）による造語であり、彼により1921年に設立されたアチックミュージアム（屋根裏博物館）の同人によりその後、調査研究がすすめられ、その後身である日本常民文化研究所の民具研究講座の参加者の要請により1975年に日本民具学会が設立された。一昨年、2013年は、渋沢没後50年であり、彼が構想した国立民族学博物館での特別展をはじめさまざまな催しが行われた。日本民具学会も本年度で設立40周年を迎える。まさに民具、「我々同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』1936）という語は人口に膾炙し、また資料館や博物館の展示などを通して日本国内では一定の市民権を得たといえる。その一方で今日、主に高度経済成長期に不要とされ蒐集、収蔵された実物の民具は市町村合併などの影響も受け、行政当局より同一民具の廃棄や資料館の休・廃館が要請されるなど、二度目の滅失の危機にある。

1982年、神奈川大学に移管された後も神奈川大学日本常民文化研究所（以下常民研）では、二大研究柱の一つとして『民具マンスリー』の刊行、民具研究講座などを開催し民具実測法の実務などを提供し民具研究の進展に寄与してきた。こうした活動が認められ、2003～2007年度文部科学省21世紀COEプログラムに「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が採択され、その中で民具は、有力な地域情報資料として位置づけられ、「只見町インターネット・エコミュージアム」システムの開発が試みられ、2006年度には国際シンポジウム「民具は世界を結ぶ」が当地で開催されるなど非文字資料としての民具研究の国際的な展開が要請されることとなった。

この度の2009～2013年度にわたる文部科学省認定の共同研究拠点事業「国際常民文化研究機構」では、民具は、「民具資料の文化資源化」の研究分野のもと、①民具の名称に関する基礎的研究（代表：神野善治）②東アジアの民具・物質文化から見た比較文化史（代表：角南聡一郎）の二つのテーマで扱われた。私も通称、神野班の一員として参加したが、まずは民具の定義の検討から始まり、本題の名称問題に入ると、同地域でも谷が違ふと名が違ふなど地域名称の多様性を痛感することになった。そこで、一つの民具に対して共通名・標準名を決めつけるのではなく、現段階では「検索タグ」としての呼称と考えることでグループ内での意見は落ち着いたが、国際的になると言葉の壁もありさらに複雑となる。サムネイルで図像を添付し常民研の得意とする絵引き的方式をとることでその補完をすることになった。本書は、その成果として、昨年の『国際常民文化研究叢書』6—民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]の表組をもとに只見・奥三面・川崎・羽村・沼津・徳山・滋賀・鹿児島・沖縄・イラン・韓国の地方別の呼称を加えて一覧表にし、画像と解説文をつけたものである。

民具の国際標準名の作成をめぐることは、2010年に「“モノ”語り—民具・物質文化からみる人類文化—」の題で国際シンポジウムを開催し、フランス・中国・アメリカの研究者も交えて論議し、まずは「検索タグ」として民具の呼称を考え、やがて国際的な研究体制が整って後に、考古学や科

学技術史におけるような共通名の検討を提案した。いずれにせよ、世界中の普通の人々の暮らし、庶民の生産活動や生活を解明するのに“民具”は、有形の物質文化であるだけに第一級の基本資料となりうる。民具の概念を学術語“*mingu*”として国際的に普及させ、さらに民具研究の進展を図るには、一対一の物に対応した共通名称を将来的には設定する必要がある。

民具の命名体系の背景にはそれぞれの民族の自然観や世界観が反映し、また地域性、時代性、階層性などの属性が加わり、さらに近代化の中での位置づけも問われ、共通名称の設定は一筋縄ではいかないが、指標となる民具をいくつか取り上げ、日本、東アジア、アジア、中東、ヨーロッパと比較対照しながら民具の共通名称化の可能性を探ることが第一段階となる。この過程で、最新の情報工学の分類法や発信法も積極的に導入することが重要であり、その成果も踏まえ将来『国際民具辞典』が刊行されれば、世界の人々の等身大の生活理解の一助となることは確かである。

日本で培われたともいえる民具研究は、今日新たに注目されている庶民の日常生活を対象とする学問、日常史・*history of everyday life* 研究に対しても多くの示唆を与えている。またグローバル化の中、ポストモダンから近代化の途次にある国々まで、世界の人々の生活文化が均質化する一方で個別性も持続し並行する現代社会にあって、民具は可視的な物質文化であるだけに言葉の壁を越え、互いの生活文化理解の導入に最適であり、そこに学術的な民具学の可能性が広がり、また地域住民の生活の過去・現在を語り未来を志向するための判断材料、文化資源として見直されているといえる。本書はその試み・先駆けといえるのである。